

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 文化資源論講座 有形文化資源論分野  
中川 毅人

【論文題目】 先史時代の狩猟活動

【授与する学位の種類】 博士（文学）

#### 【論文審査の結果の要旨】

中川毅人の論文は、縄文・弥生時代の重要な動物性エネルギー源であるシカとイノシシについて、その狩猟の季節性を把握することで、先史時代における通年的な生業活動の実態解明を試みたものである。

シカやイノシシの第1後臼歯にみられる歯牙セメント質の成長線が年輪にあたることを最初に指摘したのはシェファー（1950年）であり、その後グルーとジェンセンにより、成長線の最も外側の部分が動物の死亡した季節を表すことが証明された（1979年）。これらの見解を基にして、欧米では先史時代の遺跡から出土する哺乳動物の歯牙を切断してその成長線を把握することで、狩猟活動の季節性を明らかにする研究が進められてきた。

こうした研究を受けて中川は、現世の野生イノシシの歯牙の分析をおこない、狩猟の季節性が把握できること、一方家畜飼育されたブタには成長線が見られないことを多くの資料にあたって突き止め、歯牙セメント質の形成においては、それらの季節的な食べ物の種類に依存することを明らかにして、日本においても歯牙の成長線を分析して屠殺季節を同定するには有効であることを指摘して、日本で最初に多数の事例を取上げて具体的な資料の解析を行った。

分析の対象としたのは西日本の縄文時代遺跡6遺跡、弥生時代5遺跡から検出されたシカとイノシシで、それぞれがその地域を代表する標識的な遺跡出土動物である。分析した個体数は縄文時代ではシカ46個体、イノシシ114個体、弥生時代ではシカ11個体、イノシシ47個体である。これらの資料から死亡季節を特定することにより、縄文時代においては通年的な狩猟活動が営まれていたのに対して、弥生時代においては、狩猟活動が冬季に集中する類型（佐賀県牟田寄遺跡、詫田西分貝塚、大分県下郡桑苗遺跡）、通年的におこなわれる類型（鹿児島県高橋貝塚）、通年的ではあるが冬季にピークを迎える類型（島根県西川津遺跡）と3類型に弁別できることを指摘した。

こうした狩猟活動の季節性の違いが何に起因するかを明らかにするために、各遺跡出土の石器類を、農耕具、狩猟具、漁撈具、採集具、調理具、その他に分けて、農耕生活に関する石器比率の違いを分析することで、穀物栽培への依存度を明らかにした。その結果、狩猟が冬季に集中する類型では穀物栽培が卓越する遺跡、通年的な狩猟を行う類型では穀物栽培が行われるものの、生産活動の主体ではない遺跡、通年的ではあるが冬季に狩猟のピークを迎える類型では、穀物栽培を主体としながらも多様な食料獲得活動が行われていた遺跡にそれぞれ該当することを突き止めた。

弥生時代は水稻栽培に基盤をおく社会が形成されたと一般には想定されているが、本論文では遺跡から検出される動植物遺存体の分析を進め、実際には地域的には多様な生業活動が営まれていたこと、しかも穀物栽培との関係で狩猟活動への依存度が異なることを初めて、具体的資料を以って論じたものであり、今後の生業活動研究の方向性を示したものとして、その重要性は高く評価される。

中川毅人のこれら斬新な接近方法とその見解は、今後先史時代生業活動研究の基礎となりうるものであり、博士（文学）の研究論文として適格であると判断される。

### 【最終試験の結果の要旨】

学位申請者は、平成 22 年 1 月 9 日に実施した口頭試問及び 1 月 23 日開催された学位論文公開発表会において適切な応答を行い、提出されたとおりの研究能力を有することが確認された。これら及び学位論文審査の結果に基づき、申請者に博士（文学）の学位を授与することができると判断する。

### 【審査委員会】

主査	甲元	眞之
委員	木下	尚子
委員	小畑	弘己
委員	杉井	健
委員	稲葉	継陽